

平成22年仕事納め式訓示

平成22年12月30日

みなさん、平成22年の仕事納めを迎えました。

おかげさまで、この一年間、村井副町長、また、年度途中で就任となりました岩城教育長をはじめ職員のみなさんが、それぞれの立場で、しっかり頑張っていたいたおかげで、しっかりと町政を進めてくることができました。

あらためて、心から御礼を申し上げる次第でございます。

しかし、今年の水産水揚げ動向では、昨年同様に30億円を2年連続で下回るという、過去に例をみない状況であり、観光も8年連続の入込減少となって、来年度の税収も引き続いて不安を感じているところでございます。

また、政権交代による「コンクリートから人へ」という民主党政権のもとで、公共事業費は削減、さらに、国の予算も歳入不足から赤字国債に頼る状況にあり、加えて景気の後退、デフレ現象と円高という厳しい経済情勢の真ただ中で、私達は、また新しい年を迎えるわけであります。

したがって、今こそ、職員皆さんの知恵と工夫が求められているんだということをしっかりと自覚していただきたいと思うのでございます。

日本経済新聞がアンケートで「厳しい状況に直面したり、気分が乗らなかつたりしたときに自分を元気づけたり、気持ちを切り替えたりする言葉」を聞いたところ、一番多かった言葉が「なるようになる、なるようにしかならない。」という言葉だったそうであります。

2位が「まあいいか、気にしない」、3位は「人は人、自分は自分」であります。また、この言葉は、幅広い世代から支持されていますが、年齢層によって受け取り方がちがうことも分ったそうであります。

中高年の多くは「今苦しくても打開策は必ず出てくる」ということ、或いは「落ち込んでいる時間がもったいない」と自らが十分に手を尽くしたうえで、この言葉を使って気持ちを変えようとする意識が強いということも分ったわけであります。

一方、若い方はと言いますと「期待するから失望するんだ」とあきらめたような意見が多かったという調査結果だったそうであります。しかし、決してあきらめや投げやりな言葉ではありません。高度成長期を支え、頑張るのが当然とされてきた中高年の世代は「肩の力を抜くようにと周囲からもこう言われるのでしょいうね」ということ、また、若者世代については「否定的な評価を嫌う人が多いために、この言葉を心の防波堤にしているのではないか」とコメントされていました。

私から申し上げるまでもなく、私たちは公務員として、常に厳しい環境の中に置かれています。

地域の活性化のため、町民福祉の向上のためなどなど、多くの課題を抱えながら、同時に、大きな期待を背負って仕事をしているのであります。

でも、決して重荷としてとらえるのではなく、できれば自分に肯定的な言葉、例えば「よく頑張っているね、偉いね」とか「楽あれば苦あり」「笑う門には福来る」など笑顔を意識すると行動も前向きになりやすいということでもあります。

また、今年も日本人がノーベル化学賞の栄誉に輝きました。北大の鈴木章名誉教授と米パデュー大学の根岸英一教授のおふたりであります。

お二人は「大きな櫛の木も小さなドングリから」という言葉を信じ、その言葉のどおりに偉大な功績を残されました。

「重箱の隅をつつくような研究はするな!」「教科書に載るような研究をしよう!」という考えを受け継いで後輩の指導にあたられてこられたわけでございます。

そして、常に夢を追い続けてこられたそうであります。

宇宙探査機の「はやぶさ」は、大きなトラブルを抱えながらも7年以上のときを経て、宇宙から大きな貴重な資料を持って無事地球に奇跡の帰還をしました。

私たちも、あきらめることなく、「ふるさと礼文町を日本一元気な町にするんだ!」そんなロマンを求めて、来年は、笑顔で困難を跳び越えられる一年にしたいと願っているところでございます。

さて、いよいよ、明日から年末年始の休みになります。
いつも言うことではありますが、世の中が不景気になればなるほど公務員に対する目は厳しくなっております。

私は、常に、職員のみなさんが町を元気にする原動力になっている。町づくりのリーダーは、まちがいなく職員のみなさんお一人お一人の力であると声を大にして申し上げております。

そして、それは「使命感と気力」を持つことであると思えます。

どうぞ、このことをいつも心に置いて、公務員としての自覚を忘れず、責任ある行動をしていただきたいとお願いを申し上げます。

明日から大切なご家族ともども、ゆっくりとお正月をすごされまして、きたる新しい年2011年に向かって、しっかりと鋭気を養ない、仕事始めには元気でお会いできることを楽しみにして、今年最後のあいさつといたします。

一年間、大変ありがとうございました。